

介護の仕事に対する高校生の意識に関する調査研究

岩館亜沙美 韓 志誠 田嶋 美玖 趙 彩云 延足 愛莉

宮崎 優香 鳴海 孝彦 赤羽 卓朗

要 約

高等学校 1 年生を対象に、福祉や介護の仕事に対する意識について、質問紙調査を実施した。福祉や介護の仕事を見たり体験することは、福祉や介護の仕事に関心を有することや、将来の仕事として選択することに関連があると認められた。福祉や介護の資格については周知度が必ずしも高くはなかった。福祉や介護の仕事については、社会的必要性や価値が高いととらえられているが、勤務条件や身体的・精神的負担度については、マイナスのイメージでとらえられている傾向にある。また、回答者の多くが職業を通じて人間関係を深め、専門性を高め、感謝される存在でありたいと願っていると考えられ、福祉や介護の職場においては、若者から選択される職場となるために、こうした点について十分に配慮する必要があると考えられる。

キーワード：介護の仕事、高校生、意識調査

I はじめに

我が国では、介護人材の不足が慢性化しており、厚生労働省が発表した、都道府県による第 8 期介護保険事業計画の介護サービス見込み量に基づく推計では、2025 年には現在より 32 万人増の約 243 万人の介護職員が必要とされている¹⁾。

また、日本介護福祉士養成施設協会の集計によると、全国の介護福祉士養成施設の入学定員及び入学者数は、2006 年には定員 26,855 人で入学者数は 19,289 人（定員充足率 71.8%）であったが、2022 年の入学定員数は 12,467 人と半減以下となり、入学者数は 6,807 人（定員充足率 54.6%）にまで減少している。また、入学者の内、外国人入学者は 22 개국から 1,880 人となっており、入学者に占める割合は 27.6%となっている²⁾。

現状は、介護人材の必要性が高くなっているものの、介護福祉士養成施設入学者が大幅に減少していることが示している通り、介護職員を目指す若者が大きく減少しており、介護保険事業の運営に直接的な影響を及ぼしてくる可能性も小さくはない。介護人材の養成確保は、地域社会における重要な課題となっている。

介護福祉士養成施設への入学者の減少の背景には、若者世代の介護の仕事に対する意識のあり方が大きく影響している可能性があることと想定されることから、本研究では、若い世代の介護の仕事に対する意識について調査を行いその実態を明らかにするとともに、若者世代が介護の仕事に関心をもち、将来の職業選択の選択肢にするために必要な条件などについて検討を行い、地域の介護人材不足の解消方策について提言を行うことを目的とする。

II 調査対象及び主な調査項目

1 調査対象

調査対象は、青森県内に所在する高等学校 2 校の 1 学年に在籍している高校生とした。調査対象校には、事前に訪問して調査について説明を行い、了解をいただいた。なお、1 年生を対象としたのは、現時点では進路が最終的に決定していないと想定したことによる。

2 主な調査項目

主な調査項目は、「性別」「同居家族の状況」「同居者に要介護者はいるか」「親族に介護施設に入所している人はいるか」「家族や親族に介護の仕事をしている（していた）人がいるか」「福祉・介護の仕事を見たり体験したことはあるか」「福祉や介護の仕事に関する資格を知っているか」「福祉や介護の仕事について、どう感じているか」「働くことや職場についての考え」「福祉や介護の仕事に関心があるか」「将来、福祉や介護の仕事を希望しているか」である。

Ⅲ 調査方法

調査は質問紙法により実施した。事前に系列校2校を訪問し、学校側に調査目的や調査方法を説明し、1年生を対象に調査を実施することについて了解を得た。

その後、系列校を通じて調査対象者に調査説明書及び調査票（質問紙）を配布した。調査説明書には、「研究の目的」「所要時間」「個人情報の管理・保管・破棄の方法」「調査結果の発表方法」「連絡先」「研究倫理委員会の連絡先」などを記載し、調査に同意する場合にのみ任意の時間に調査票に記入し、学校内に設置した回収ボックス（鍵がかかるもの）に入れていただくようお願いした。また、調査説明書には、調査票の提出があったことにより、調査に同意したとみなすこと、調査に協力するか否かによって不利益を被ることがないことを併せて記載した。

調査票を配布してから10日程度経過後に回収ボックスを回収し、集計分析を行なった。

調査対象者は、系列校2校を合わせて、男性233人(59.3%)、女性160人(40.7%)、計393人であった。

Ⅳ 倫理審査について

本調査研究の実施について、「八戸学院大学・八戸学院大学短期大学部倫理委員会」の審査を受け、2022年10月25日付けで承認されている（審査番号【22-12】）。

Ⅴ 調査結果

1 回収状況

回収があったのは、男性121人(60.8%)、女性78人(39.2%)、計199人(100.0%)であり、回収率は、男性51.9%、女性48.8%、合計50.6%となった（図1）。

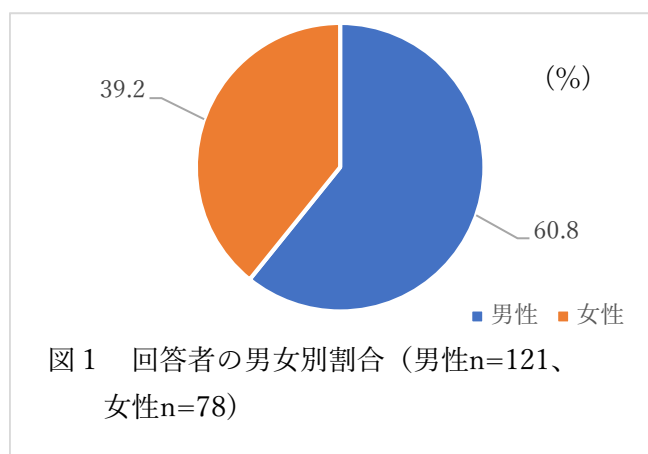


図1 回答者の男女別割合（男性n=121、女性n=78）

2 同居家族について

同居家族（「普段一緒に住んでいる人」）は、表1の通りとなった。回答者の内、父母両方と一緒に住んでいるのは138人（69.3%）、祖父母の両方もしくは一方

と住んでいるのは56人（28.1%）であった。また、兄姉や弟妹と住んでいるのは138人（69.3%）であった。

表1 普段一緒に住んでいる

	父	母	祖父	祖母	兄や姉	弟や妹	人 (%)
男性	88(72.7)	114(94.2)	23(19.0)	37(30.6)	47(38.8)	63(52.1)	6(5.0)
女性	55(70.5)	75(96.2)	13(16.7)	17(21.8)	40(51.3)	40(51.3)	3(3.8)
合計	143(71.9)	189(95.0)	36(18.1)	54(27.1)	87(43.7)	103(51.8)	9(4.5)

3 現在の同居人に介護が必要な人はいるか

「介護施設に入所している人を除き、一緒に住んでいる人に介護が必要な人がいるか」では、介護が必要な人と同居しているのは4人(2.0%)のみであった。(図2)。「誰が主に介護を行っているか」では、母、祖母、自分、その他が各1人となっている。

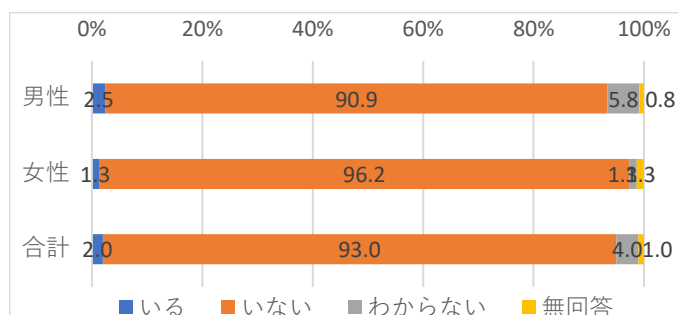


図2 現在の同居人に介護が必要な人はいるか (%)

4 親族に介護施設に入所している人はいるか

「あなたの親族(祖父母や曾祖父母)に、介護施設に入所している人はいるか」では、「いる」と回答したのは26人(13.1%)であった(図3)。

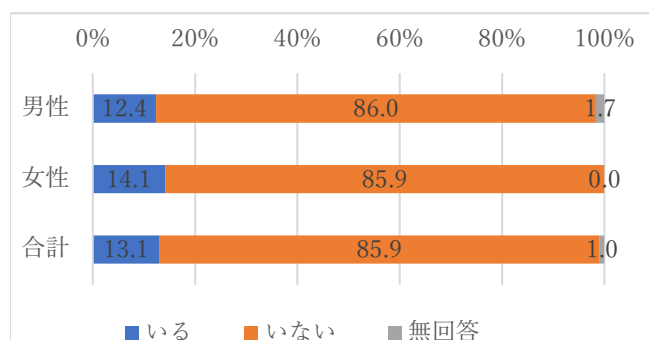


図3 親族に介護施設に入所している人はいるか (%)

5 家事や家族の世話などを日常的に行っていた、あるいは現在も行っているか

「大人が行うと考えられている調理や洗濯などの家事や家族の世話などを日常的に行っていた(あるいは現在も行っている)ことはあるか」では、「以前していた」「している」「同居していないがしている」を合わせると95人(47.7%)となった(表2)。

表2 家事や家族の世話などを日常的に行っていた、あるいは現在も行っているか (%)

	以前していた	している	同居していないがしている	当てはまらない	無回答	合計
男性	25(20.7)	27(22.3)	9(7.4)	59(48.8)	1(0.8)	121(100)
女性	6(7.7)	26(33.3)	2(2.6)	43(55.1)	1(1.3)	78(100)
合計	31(15.6)	53(26.6)	11(5.5)	102(51.3)	2(1.0)	199(100)

6 家族や親族に、「介護の仕事」をしている人またはしていた人はいたか。

「家族や親族に、「介護の仕事」をしている人またはしていた人はいたか」では、重複を除いた実数で86人(46.2%)が「いる」もしくは「いた」と回答している。「介護の仕事」をしている(いた)家族や親族として最も多いのが「母」で43人(21.6%)であった(表3)。

男女別では、重複を除いた実数で男性は51人(41.2%)、同じく女性35人(44.9%)となり、男女間で大きな相違は認められない。

なお、その他には「母の友人」など家族や親族に含まれない可能性がある回答もあったが、そのまま計上している。

表 3 家族や親族に「介護の仕事」をしている人はいる（いた）か (%)

	父	母	兄弟姉妹	祖父母	その他	合計
男性	3(2.5)	22(18.2)	2(1.7)	12(9.9)	16(13.2)	55(45.5)
女性	0(0.0)	21(26.9)	3(3.8)	2(2.6)	11(14.1)	37(47.4)
合計	3(1.5)	43(21.6)	5(2.5)	14(7.0)	27(13.6)	92(46.2)

7 福祉・介護の仕事を見たり体験したことはあるか

全体では、「これまで福祉・介護の仕事を見たり体験したことはあるか」では、「ある」と回答したのは 84 人 (42.2%) であった (図 4)。

「ある」と回答したのは、男性は 41 人 (33.9%)、女性は 43 人 (55.1%) であった。女性の方が「ある」と回答した者の割合が大きくなっている。

カイ二乗検定の結果では、カイ二乗値 = 9.01153 (自由度 1)、P 値 = 0.002682 となり、 $p < 0.01$ で有意な差が認められ、「ある」と回答した割合は、女性の方が有意に大きいと考えられる。なお、検定においては、無回答を除いた数値で実施している (以下同じ)。

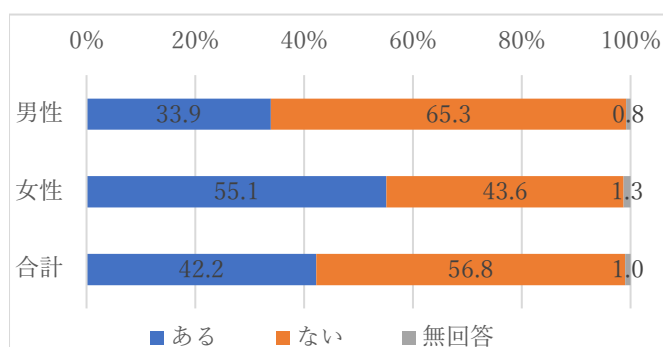


図 4 福祉・介護の仕事を見たり体験したことはあるか (%)

8 福祉・介護の仕事を見たり聞いたり体験した内容

「これまで福祉・介護の仕事を見たり聞いたり体験したのは、どのような内容か」では (複数回答)、「職場体験、インターンシップ」が 43 人 (21.6%)、「ボランティア」が 14 人 (7.0%) などとなっている。男女とも「職場体験、インターンシップ」が最も多くなっている。女性で「家族や親族の介護」と回答した者はいなかった (図 5)。

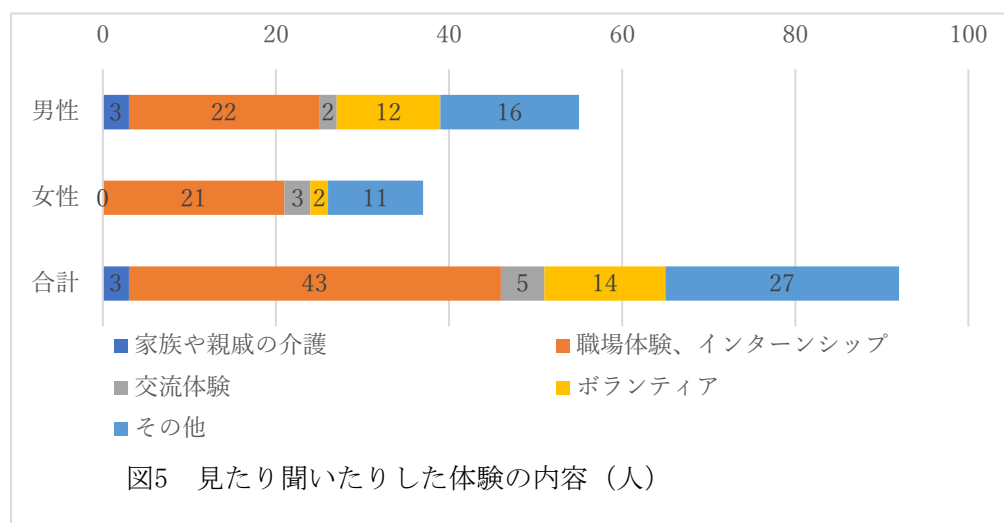
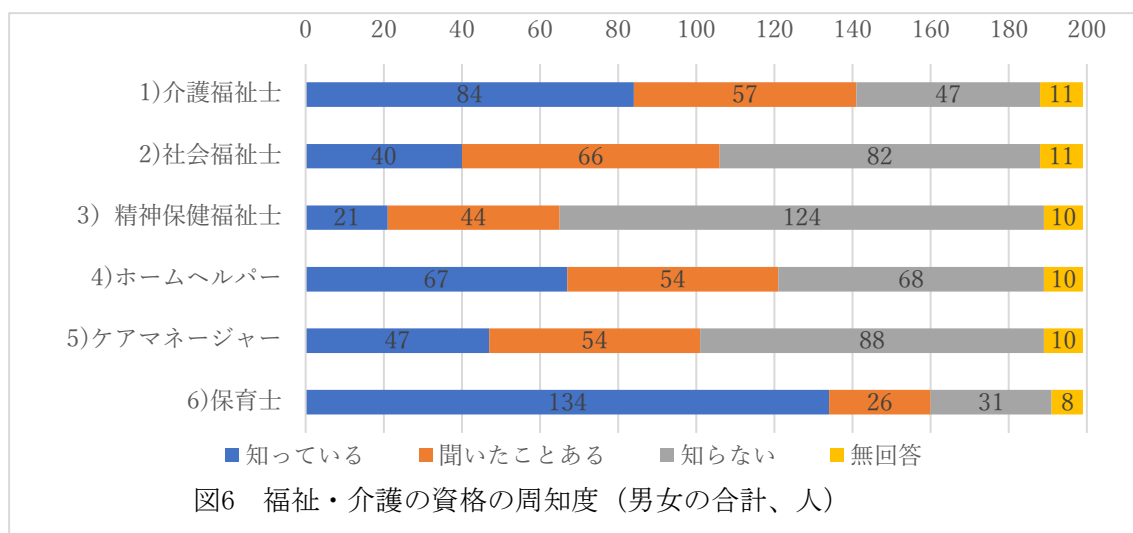


図 5 見たり聞いたりした体験の内容 (人)

9 福祉や介護の仕事の資格の周知度

(1) 男性と女性を合わせた周知度

福祉や介護の仕事に関する資格（介護福祉士、社会福祉士、精神保健福祉士、ホームヘルパー、ケアマネージャー、保育士の6つの資格）の周知度（「知っている」と回答した者の割合）では、保育士の周知度が最も高くなっている134人（67.3%）。次いで介護福祉士84人（42.2%）、ホームヘルパー67人（33.7%）、ケアマネージャー47人（23.6%）、社会福祉士40人（20.1%）、精神保健福祉士21人（10.6%）の順となった。精神保健福祉士についての周知度が最も低くなっている。保育士の周知度が高いのは、自らが保育所を利用した経験などがあることによる影響と考えられる（図6）。



（2） 男女別の周知度

また、男性と女性の周知度を比較すると、女性の周知度は6つの資格全てにおいて男性を上回っていた。

1） 介護福祉士の周知度（図7）

男性では39人（32.2%）、女性では45人（57.7%）が「知っている」と回答している。カイ二乗検定の結果では、カイ二乗値=15.2101（自由度 2）、P値=0.000497 となり、 $p < 0.01$ で男女の回答に有意な差が認められ、介護福祉士の周知度は、女性の方が男性よりも有意に高いと考えられる。

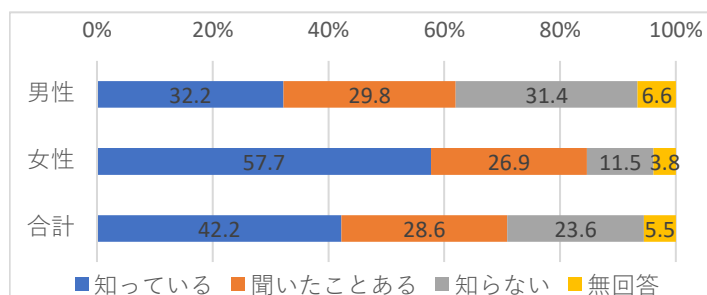


図7 介護福祉士資格の周知度（男女別、%）

2） 社会福祉士の周知度（図8）

男性では21人（17.4%）、女性では19人（24.4%）が「知っている」と回答している。カイ二乗検定の結果では、カイ二乗値=6.85748（自由度=2）、P値=0.032427 となり、 $p < 0.05$ で男女の回答に有意な差が認められ、社会福祉士の周知度は、女性の方が男性よりも有意に高いと考えられる。

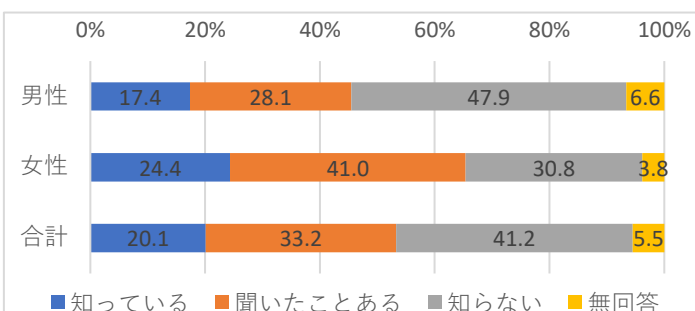


図8 社会福祉士資格の周知度（男女別、%）

3) 精神保健福祉士の周知度(図 9)

男性では 12 人 (9.9%)、女性では 9 人 (11.5%) が「知っている」と回答している。カイ二乗検定の結果では、カイ二乗値=4.77457 (自由度=2)、P 値=0.091878 で、 $p > 0.05$ となり、男女の回答に有意な差は認められなかった。

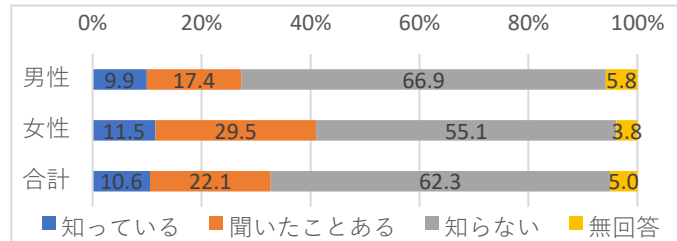


図9 精神保健福祉士資格の周知度(男女別、%)

4) ホームヘルパーの周知度 (図 10)

男性では 29 人 (24.0%)、女性では 38 人 (48.7%) が知っている」と回答している。カイ二乗検定の結果では、カイ二乗値=4.77457 (自由度=2)、P 値=3.2829E-5 で、 $p < 0.01$ となり、ホームヘルパーの周知度は、女性の方が男性よりも有意に高いと考えられる。

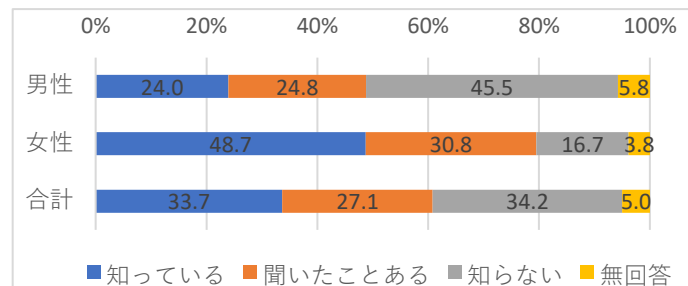


図10 ホームヘルパー資格の周知度 (男女別、%)

5) ケアマネージャーの周知度 (図 11)

男性では 18 人 (14.9%)、女性では 29 人 (37.2%) が知っている」と回答している。カイ二乗検定の結果では、カイ二乗値=32.201 (自由度=2)、P 値=1.01775e-07 で、 $p < 0.01$ となり、ケアマネージャーの周知度は、女性の方が男性よりも有意に高いと考えられる。

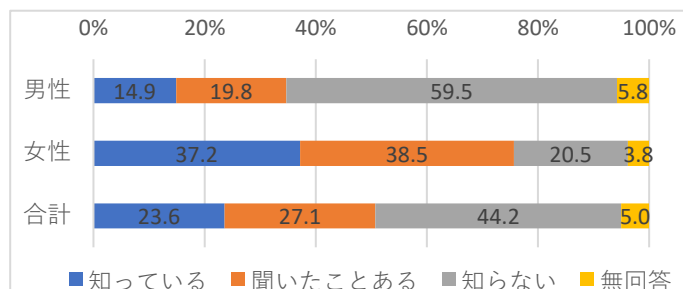


図11 ケアマネージャー資格の周知度 (男女別、%)

6) 保育士の周知度 (図 12)

男性では 69 人 (57.0%)、女性では 65 人 (83.3%) が知っている」と回答している。Fisher の方法により計算した正確な P 値=0.0001574 であり、 $p < 0.01$ となり、男女間の回答に有意な差が認められた。

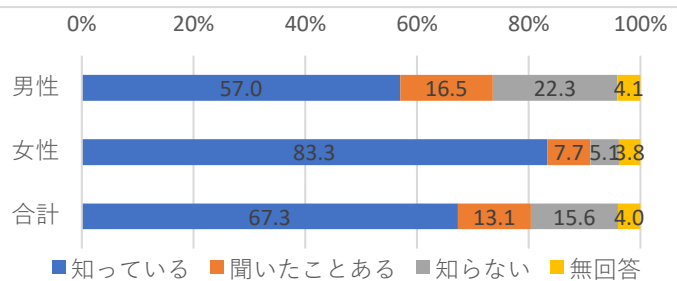


図12 保育士資格の周知度(男女別、%)

10 福祉や介護の仕事についてどう感じているか

(1) 仕事としてのやりがい (図 13)

「やりがいがある仕事だと思う」と回答したのが 174 人 (87.4%) であり、「あまりやりがいはないと思う」と回答した 7 人 (3.5%) を大きく上回っている。

男性・女性とも大半の者が、福祉や介護の仕事について「仕事としてのやりがいがある」と回答しており、男女の回答割合に有意な差は認められなかった。

(2) 福祉や介護の仕事に対する社会的評価 (図 14)

全体では、「社会的評価が高い仕事だ」と回答したのが 121 人 (60.8%)、「社会的評価はあまり高くないと思う」と回答したのが 13 人 (6.5%)、「わからない」が 64 人 (32.2%) となっている。半数以上の者が、「社会的評価が高い」と回答している。

男女の回答割合に有意差は認められなかった。

(3) 他の仕事と比較しての、福祉や介護の仕事の勤務条件 (図 15)

全体では、給与や休日などの勤務条件について「勤務条件のいい仕事だ」と回答したのは 36 人 (18.1%)、「勤務条件のいい仕事とは思わない」と回答したのは 70 人 (35.2%)、「わからない」と回答したのが 90 人 (45.7%) となった。「勤務条件のいい仕事だ」と回答した者は 2 割に満たない結果となった。

男女の回答割合についてカイ二乗検定を行ったところ、カイ二乗値=8.2941

(自由度 2)、P 値=0.0158106 となり、男女間の回答割合には $p < 0.05$ で有意な差が認められた。女性では男性よりも「いい仕事とは思わない」という回答の割合が有意に大きく、男性では女性よりも「わからない」という回答の割合が有意に大きくなっている。福祉や介護の仕事の勤務条件について、男性より女性の方が否定的な評価をしている者の割合が有意に大きいと考えられる。

(4) 他の仕事と比較しての、福祉や介護の仕事の身体的負担度 (図 16)

全体では、「身体的負担度が高い仕事だ」と回答したのが 147 人 (73.9%)、「身体的負担度はあまり高くないと思う」と回答したのが 14 人 (7.0%)、「わからない」と回答したのが 37 人 (18.6%) であった。約 4 分の 3 の者が福祉介護の仕事は身体的負担度が高いと回答している。

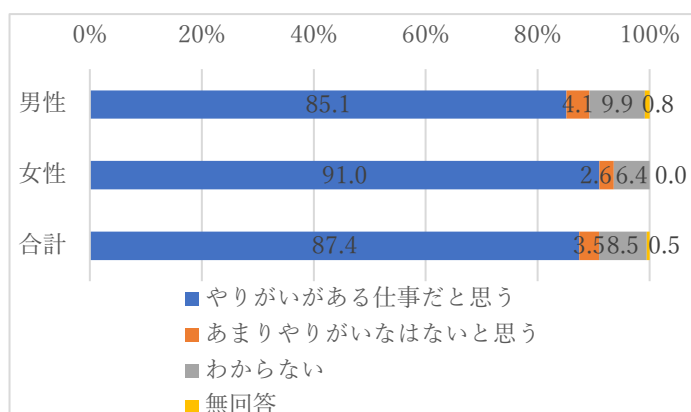


図13 仕事としてのやりがい (%)

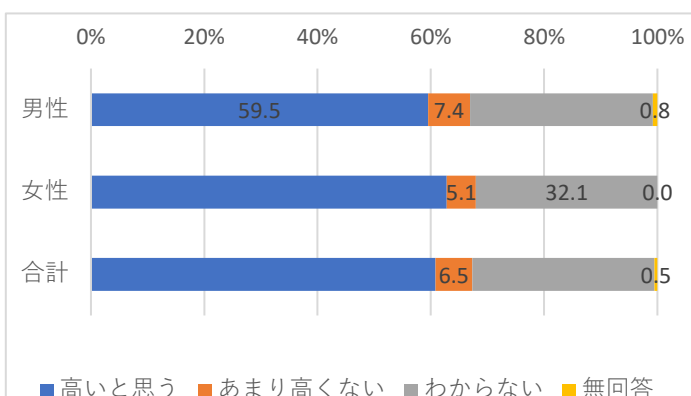


図14 福祉や介護の仕事に対する社会的評価 (%)

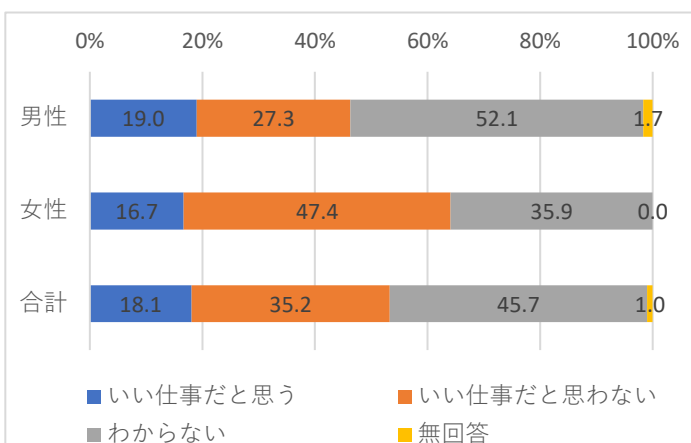


図15 福祉や介護の仕事の勤務条件 (%)

男性と女性の回答を比較すると、Fisher の方法により計算した正確なP値は 0.0018314 となり $p < 0.01$ で有意な差が認められた。男女とも身体的負担度が高いと回答している者の割合が大きい、男性より女性において、身体的負担度が高いと回答した者の割合が有意に大きいと考えられる。

(5) 他の仕事と比較しての、福祉や介護の仕事の精神的負担度 (図 17)

全体では、「精神的負担度が高い仕事だと思う」が 145 人 (72.9%)、「精神的負担度はあまり高くないと思う」が 13 人 (6.5%)、「わからない」が 40 人 (20.1%) となり、精神的負担度が高い仕事とする回答が最も多くなっている。

男性と女性の回答割合を比較すると、Fisher の方法により計算した正確なP値=0.066465 となり、 $p > 0.05$ で有意な差は認められなかった。

(6) 福祉や介護の職場の雰囲気について (図 18)

全体では、「雰囲気のいい職場だと思う」と回答したのが 86 人 (43.2%)、「雰囲気はあまりよくない職場だと思う」と回答したのが 22 人 (11.1%)「わからない」と回答したのが 90 人 (45.2%) となった。

男性と女性の回答を比較すると、「雰囲気はあまりよくない職場だと思う」と回答した割合は、女性の方が男性より約 9 ポイント高くなっており、「わからない」と回答した割合は、男性の方が女性より約 15 ポイント高くなっている。カイ二乗検定の結果では、カイ二乗値=6.63562 (自由度=2)、P値=0.0362321 となり、 $p < 0.05$ で男女間の回答割合に有意な差が認められた。福祉や介護の職場の雰囲気について、男性より女性の方が、否定的な見方をしている者の割合が有意に大きいと考えられる。

(7) 福祉や介護の仕事は、他の仕事と比較して資格や専門性を活かせる仕事か (図 19)

全体では、「資格や専門性を活かせる仕事だと思う」と回答したのが 129 人 (64.8%)「資格や専門性はあまり必要ない仕事だと思う」と回答したのが 12 人

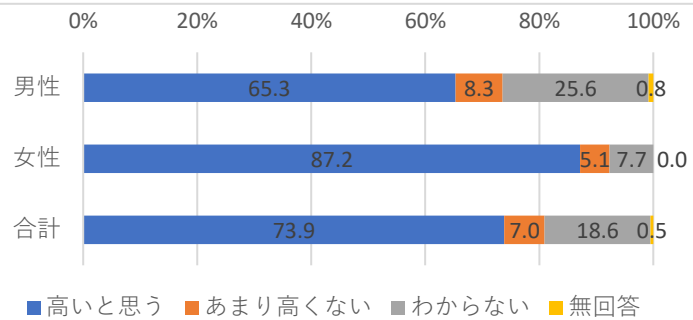


図16 福祉や介護の仕事の身体的負担度 (%)

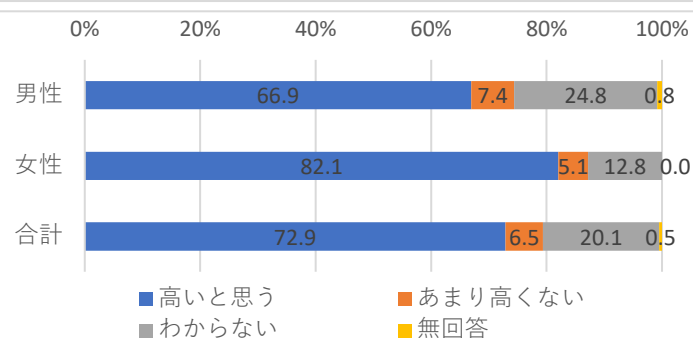


図17 福祉や介護の仕事の精神的負担度 (%)

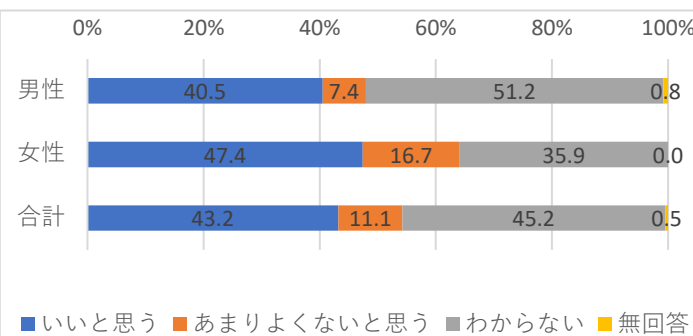


図18 福祉や介護の職場の雰囲気について (%)

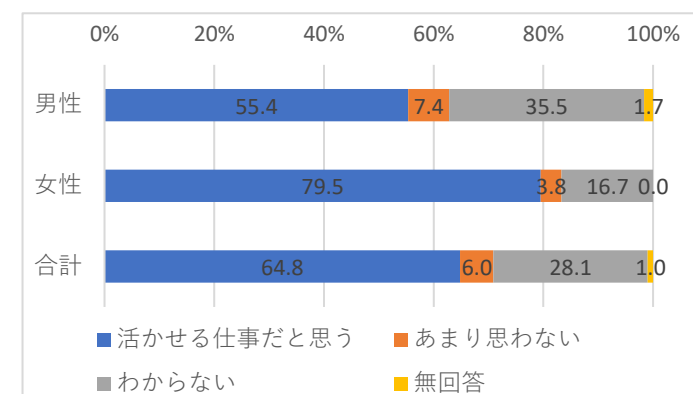


図19 資格や専門性を活かせる仕事か (%)

(6.0%)「わからない」と回答したのが56人(28.1%)であった。

男性と女性の回答を比較すると「資格や専門性を活かせる仕事だと思う」と回答した割合は、女性が男性よりも約24ポイント高くなっており、「わからない」と回答した割合では、男性が女性よりも約19ポイント高くなっている。Fisherの方法により計算した正確なP値は0.003004となり、 $p < 0.01$ であり、男女の回答割合には有意な差が認められた。

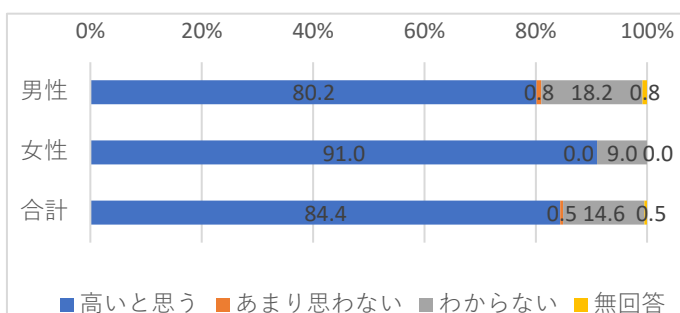


図20 福祉や介護の仕事の社会的必要性 (%)

(8) 福祉や介護の仕事の社会的必要性について(図20)

全体では、「社会的必要性が高い仕事である」と回答したのは168人(84.4%)、「社会的必要性はあまり高くない」と回答したのは1人(0.5%)「わからない」が29人(14.6%)であった。8割以上の者が社会的必要性の高い仕事と回答している。

男性と女性の回答を比較すると、「社会的必要性はあまり高くない」と回答した割合は、女性では男性より約11ポイント高くなっており「わからない」と回答した割合は、男性では女性よりも約9ポイント高くなっているが、検定の結果では有意な差は認められない。

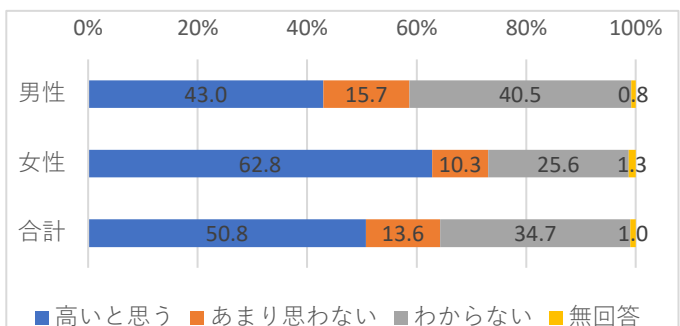


図21 福祉や介護の仕事の将来性 (%)

(9) 福祉や介護の仕事の将来性について(図21)

全体では、「将来性が高い仕事である」と回答したのは101人(50.8%)、「将来性はあまり高くない」と回答したのは27人(13.6%)、「わからない」と回答したのは69人(34.7%)であった。半数以上の者が「将来性が高い仕事」と回答しており、あまり高くないと回答した者の割合を上回っている。

男性と女性の回答を比較すると、「将来性が高い仕事である」と回答した割合は、女性では男性よりも約20ポイント高くなっており、「わからない」では、男性が女性よりも約15ポイント高くなっている。カイ二乗検定では、カイ二乗値=7.74207(自由度=2)、P値=0.0208368となり、 $p < 0.05$ で男女の回答割合には、有意な差が認められる。

11 働くことや職場についての考え方について

(1) 社会や人から感謝される仕事がしたいと思うか(図22)

全体では、「そう思う」と回答したのは174人(87.4%)「そう思わない」と回答したのは7人(3.5%)「わからない」

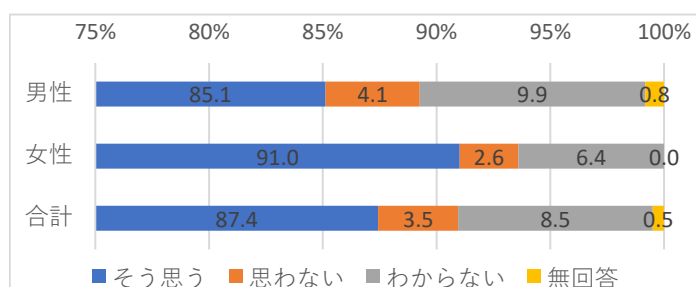


図22 感謝される仕事がしたいと思うか (%)

い」と回答したのは17人(8.5%)となった。男性と女性の回答に大きな違いは認められない。

(2) 仕事を通じて人間関係を広げたいと思うか(図23)

全体では、「そう思う」と回答したのは165人(82.9%)、「そう思わない」と回答したのは13人(6.5%)、「わからない」と回答したのは20人(10.0%)となった。性別で回答割合に大きな違いはない。

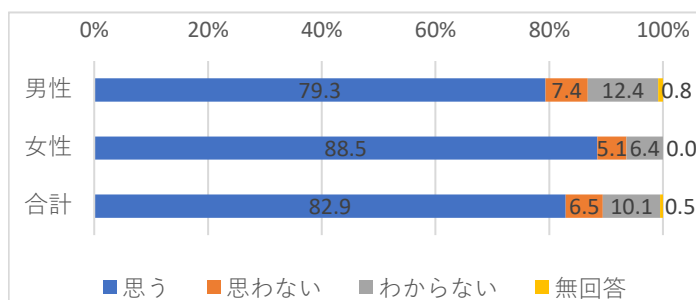


図23 仕事を通じて人間関係を広げたいか (%)

(3) ワークライフバランスに積極的に取り組む職場で働きたいと思うか(図24)

全体では、「そう思う」と回答したのは158人(79.4%)、「そう思わない」と回答したのは11人(5.5%)、「わからない」と回答したのは29人(14.6%)となった。性別で回答割合に大きな違いはない。

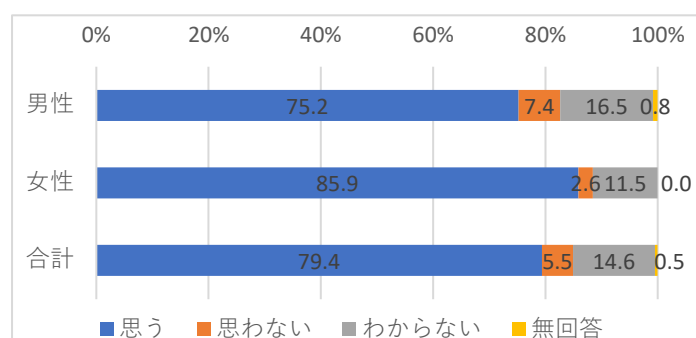


図24 ワークライフバランスに取り組む職場で働きたいか (%)

(4) どこでも通用する専門技術を身につけたいと思うか(図25)

全体では、「そう思う」と回答したのは147人(73.9%)、「そう思わない」と回答したのは14人(7.0%)、「わからない」と回答したのは37人(18.6%)となった。

男女別にみると、男性では「そう思う」が79人(65.3%)に対して、女性では68人(87.2%)となった。Fisherの方法により計算した正確なP値=0.0018314となり、 $p < 0.01$ で有意な差が認められた。女性では、「そう思う」という回答割合が有意に大きく、また、男性では女性に比して「わからない」という回答割合が有意に大きく、専門技術を身につけようとする志向は、女性の方が高いと考えられる。

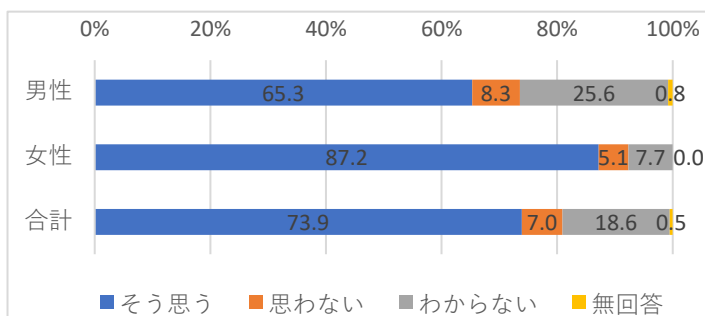


図25 専門技術を身につけたいと思うか (%)

(5) 高い役職に就くため、多少苦しくとも頑張るか(図26)

全体では、「そう思う」と回答したのは130人(65.3%)、「そう思わない」と

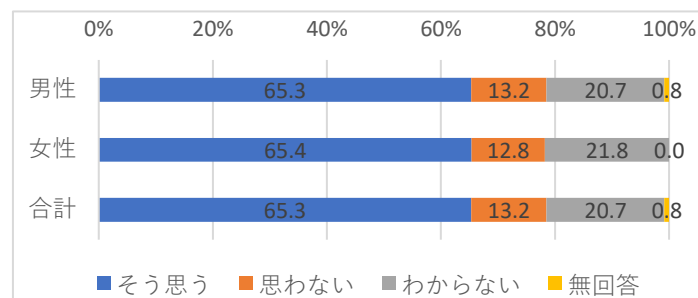


図26 高い役職に就くため、多少苦しくとも頑張るか (%)

と回答したのは26人(13.1%)、「わからない」と回答したのは42人(21.1%)となった。男性と女性の回答割合はほぼ同一となっている。

(6) 仕事を生きがいにしたいと思うか(図27)

全体では、「そう思う」と回答したのは118人(59.3%)、「そう思わない」と回答したのは52人(26.1%)、「わからない」と回答したのは28人(14.1%)となった。男女の回答割合はほぼ同一であり、有意な差は認められなかった。

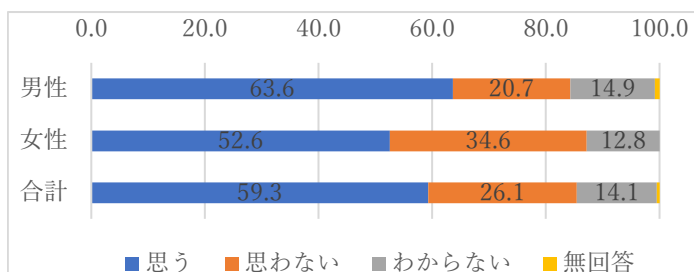


図27 仕事を生きがいにしたいと思うか(%)

(7) 仕事をしていく上での人間関係に不安を感じるか(図28)

「そう思う」と回答したのは110人(55.3%)、「そう思わない」と回答したのは41人(20.6%)、「わからない」と回答したのは47人(23.6%)となった。

男女の回答割合を比較すると、カイ二乗検定の結果、カイ二乗値=11.6841(自由度=2)、P値=0.0029028となり、 $p < 0.01$ で男女間の回答割合に有意な差が認められた。女性では、男性よりも仕事をしていく上での人間関係に不安を感じると回答した者の割合が有意に大きいと考えられる。

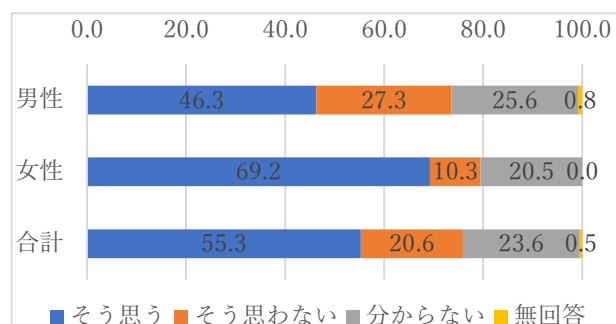


図28 仕事をしていく上での人間関係に不安を感じるか(%)

(8) 地元で働きたいと思うか(図29)

「そう思う」と回答したのは56人(28.1%)、「そう思わない」と回答したのは73人(36.7%)「わからない」と回答したのは69人(34.7%)となった。地元志向が大きくはないと考えられる。

検定の結果では、男女の回答割合に、有意な差は認められなかった。

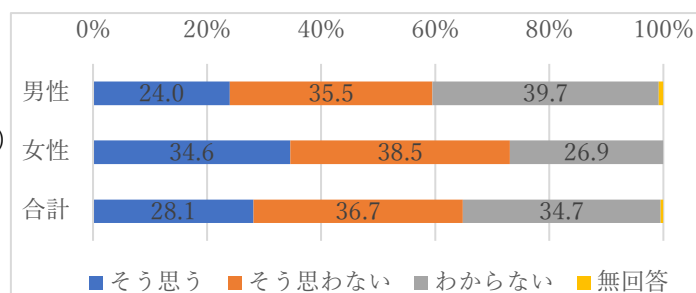


図29 地元で働きたいと思うか(%)

(9) 上司や同僚が残業していても、自分の仕事が終われば帰宅したいと思うか(図30)

「そう思う」と回答したのは95人(47.7%)「そう思わない」と回答したのは52人(26.1%)「わからない」と回答したのは42人(21.1%)となった。

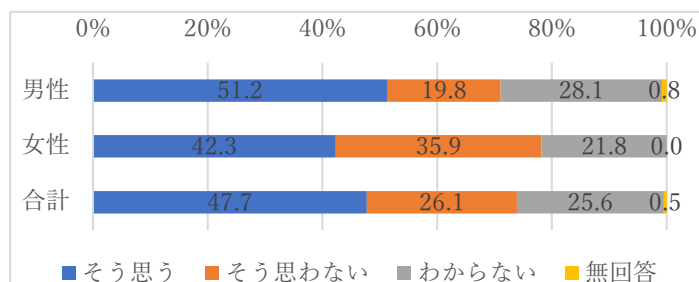


図30 上司・同僚が残業していても、自分の仕事が終われば帰宅したいと思うか(%)

答したのは 51 人 (25.6%) となった。男性と女性の回答割合についてカイ二乗検定を行った結果では、カイ二乗値=6.19672 (自由度=2)、P 値=0.045123 となり、 $p < 0.05$ で有意な差が認められた。女性では男性に比して「そう思わない」という回答割合が有意に大きいと考えられる。

(10) 仕事はお金を稼ぐための手段であって、面白くはないと思うか (図 31)

「そう思う」と回答したのは 57 人 (28.6%) 「そう思わない」と回答したのは 89 人 (44.7%) 「わからない」と回答したのは 53 人 (26.1%) となった。

男女別の回答割合では、有意な差は認められなかった。

(11) 面白い仕事であれば、収入が少なくても構わないと思うか (図 32)

「そう思う」と回答したのは 62 人 (31.2%) 「そう思わない」と回答したのは 76 人 (38.2%) 「わからない」と回答したのは 60 人 (30.2%) となった。

男女別の回答割合に有意な差は認められなかった。

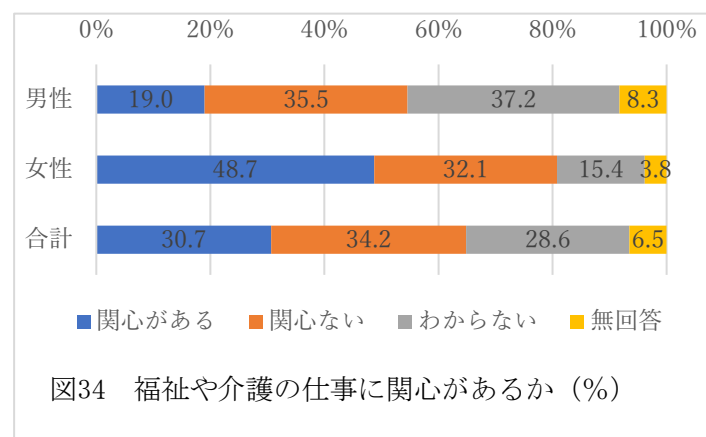
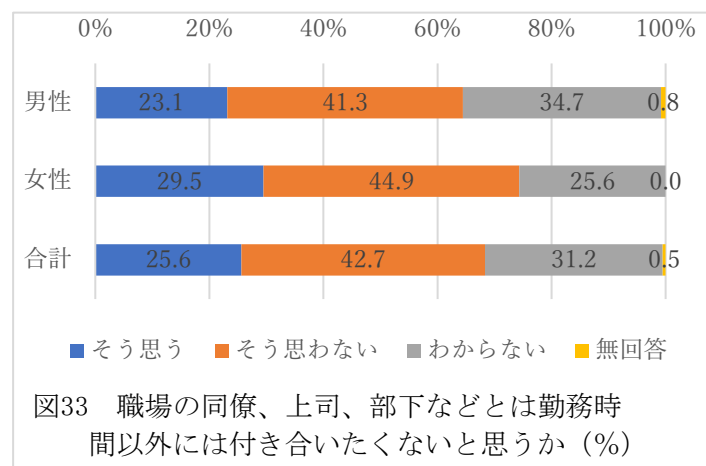
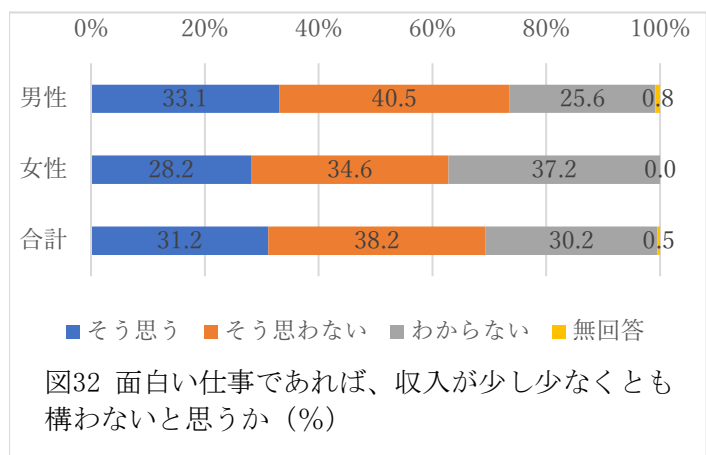
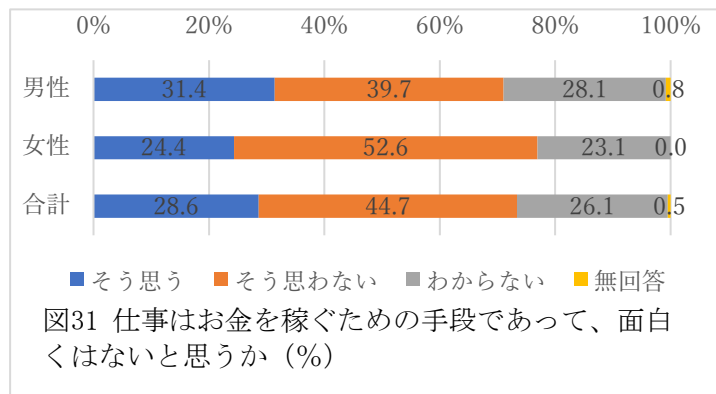
(12) 職場の同僚、上司、部下などとは勤務時間以外には付き合いたくないと思うか (図 33)

「そう思う」と回答したのは 51 人 (25.6%) 「そう思わない」と回答したのは 85 人 (42.7%) 「わからない」と回答したのは 62 人 (31.2%) となった。

男女別の回答割合に有意な差は認められなかった。

(13) 福祉や介護の仕事に関心があるか (図 34)

「関心がある」と回答したのは 61 人 (30.7%) 「関心ない」と回答したのは 68 人 (34.2%) 「わからない」と回答したのは 57 人 (28.6%) となった。



男性と女性の回答割合を比較すると、「関心がある」と回答した割合は女性では男性よりも約 30 ポイント高くなっており「わからない」では、男性が女性よりも約 22 ポイント高くなっている。カイ二乗検定の結果では、カイ二乗値＝21.3921（自由度＝2）P 値＝ 2.26339e-05 となり、 $p < 0.01$ で有意な差が認められ、女性の方が男性よりも福祉や介護の仕事に関心があると回答した割合が大きくなっている。

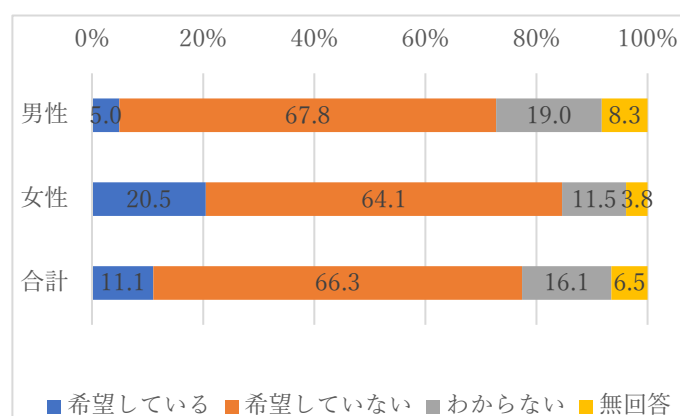


図35 将来、福祉や介護の仕事を希望しているか (%)

(14) 将来、福祉や介護の仕事を希望しているか (図 35)

「希望している」と回答したのは 22 人 (11.1%) 「希望していない」と回答したのは 132 人 (66.3%)、「わからない」と回答したのは 32 人 (16.1%) となった。

男性と女性の回答割合を比較すると「希望している」と回答した者の割合は、女性では男性よりも約 17 ポイント高くなっている。カイ二乗検定の結果では、カイ二乗値＝11.9063（自由度＝ 2）、P 値＝ 0.002597 となり、 $p < 0.01$ で有意な差が認め、「希望している」と回答した割合は、女性の方が男性よりも有意に大きいと考えられる。

Ⅵ 考察

1 福祉や介護の仕事体験等について

先行研究においては、福祉施設等でのボランティア体験は、福祉の仕事への興味や関心を高める傾向がみられるとされている³⁾⁴⁾⁵⁾。本調査においても、福祉・介護の仕事を見たり体験したりしたことがあると回答した者では、「福祉や介護の仕事に関心がある」「将来、福祉や介護の仕事を希望している」と回答している割合が有意に大きいという結果となっている（表 4）。未来の職業選択に見たり、聞いたり、体験することなどが一定の影響を及ぼす可能性はあると考えられる。

一方で、石川等⁶⁾は、兵庫県内の高校生 2 年生を対象とする調査において、福祉活動や施設見学への参加経験がある場合でも、そのことが就職選択に直接的な影響を与えるとは言い難い結果となったと述べている。経験の内容、時期、経験後のフォローアップなどを含めた対策が必要になると考えられる。SNS など、若い世代に対する情報提供方法の検討を含め、福祉・介護の仕事を見たり体験する場面や機会の提供について、工夫が必要と考えられる。

表 4 「福祉・介護の仕事を見たり体験したことはあるか」と「福祉や介護の仕事に関心がある」「将来、福祉や介護の仕事を希望している」の関係

	カイ二乗値	自由度	P 値
「福祉・介護の仕事を見たり体験したことはあるか」 × 「福祉や介護の仕事に関心がある」	11.7262	1	0.00061627 $p < 0.01$

「福祉・介護の仕事を見たり体験したことはあるか」			0.00246487
×	9.16649	1	p < 0.01
「将来、福祉や介護の仕事を希望している」			

なお、先行研究では、まわりに福祉の仕事に従事（経験）者がいることなども、福祉や介護の仕事への関心と関係があるとされている。本調査においては、祖父母の同居、家族内の要介護者の存在、施設入所者の存在、福祉や介護の仕事への従事者の有無と「福祉や介護の仕事に関心がある」「将来、福祉や介護の仕事を希望している」との関係についても検討を行ったが、検定上、有意な差異は認められず、唯一、「福祉や介護の仕事体験等」の有無のみで関連性が認められた。

本調査で福祉や介護の仕事体験等があると回答した者は4割程度となっており、新型コロナウイルス感染症流行拡大の影響で、体験があった者が少なくなっている可能性も想定され、また、施設や事業所が受け入れを制限していることもあり、体験の時期が2～3年前にさかのぼる可能性もあり、調査の結果に何らかの影響を及ぼしていることも考えられる。

2 福祉や介護の資格の周知度について

福祉や介護の仕事には公的な資格があることについて、一定の知識を有していることは、職業選択に一定の影響があると考えられる。

本調査の結果では、保育士の周知度は6割を超えていたが、介護福祉士、社会福祉士、精神保健福祉士、ホームヘルパー、ケアマネージャーについての周知度は4割程度もしくはそれ以下であった。保育士については、自らの成育過程で直接その業務について知る機会を得た者が多いと考えられるが、他の資格については實際上、見聞する機会は少ないものと考えられる。

福祉や介護の仕事体験等の機会を提供する中で、福祉や介護の資格が国家資格等として公的に位置づけられている専門性の高い資格であることについても、若い世代に伝えていく必要があると考えられる。

福祉や介護の資格に関する周知度において、男性と女性の回答割合に有意な差が認められる場合があり、男性における周知度が女性に比して低い傾向にあった。福祉や介護の仕事について、若い世代に伝えていく取り組みを展開する場合においては、男性も女性もともに働き活躍できる資格であることについても伝えていくことが重要と考えられる。

3 福祉や介護の仕事をどう感じているか

福祉や介護の仕事について、「やりがいがある」と回答した者は8割を超えており、社会的評価について「高い」と回答した者は6割程度となっている。また、資格や専門性を活かせる仕事と回答した者も6割を超えており、社会的必要性についても、8割以上の者が社会的必要性の高い仕事と回答している。こうした結果から、若い世代において、福祉や介護の仕事について、やりがいや社会的評価が高く、資格や専門性を活かせる社会的必要性が高い仕事と認識している者が多いと推定される。

このように、福祉や介護の仕事の価値や社会的な役割について、回答者の多くが重要と認めていると考えられるが、一方で、勤務条件については「いいと思わない」「わからない」といった回答が多く、身体的・精神的負担度が高い仕事もとらえている。また、将来性についても「高い」と回答したのは半数程度にとどまっている。

必要性や重要性については理解しているが、実際の業務は大変であり将来性も高くは評価されていないという結果であり、社会一般に流布している福祉や介護の仕事のイメージと同様のとらえ方がなされていると考えられる。

今後は、福祉・介護の仕事を見たり体験する場面や機会の提供などを通じて、福祉や介護の仕事の実際について、若い世代に積極的に伝えていくことが重要になってくると考えられる。

なお、福祉や介護の資格に関する周知度において、男性と女性の回答割合に有意な差が認められる場合があり、全体的に男性における周知度が女性に比して低い傾向にあった。福祉や介護の仕事について、若い世代に伝えていく取り組みを展開する場合においては、性別を問わずにともに働き活躍できる資格であることについても伝えていくことが重要と考えられる。

4 働くことや職場についての考え方

「感謝される仕事をしたい」、「仕事を通じて人間関係を広めたい」、「どこでも通用する専門技術を身につけたい」などと回答した者の割合が7割を超している。回答者の多くが、職業を通じて人間関係を深め、専門性を高め、感謝される存在でありたいと願っていることの現われと考えられる。こうしたことは、ILOが提唱⁷⁾した「ディーセント・ワークの欠損の解消」において、極めて重要な要素である。福祉や介護の職場で若い人々を受け入れていくためには、このような視点を持ち続け、ワークライフバランスにも配慮しつつ、福祉や介護の仕事を通じて若い世代が人間的に成長し満足を感じられる職場としていくことが求められるであろう。

5 福祉や介護の仕事を希望していることについて

「将来、福祉や介護の仕事を希望している」と回答した者は、男女合計で22人(11.1%)「希望していない」と回答したのは132人(66.3%)、「わからない」と回答したのは32人(16.1%)であった。多くの職業選択肢がある中で、高等学校1年生段階で、「希望している」と回答した者の割合が1割を上回っていることは、一定の重要性を有していると考えられる。進路選択を検討する中で、変化していく可能性はあるが、福祉や介護の仕事に関する情報の提供や学びの機会の提供などを通じてサポートしていくことも必要であろう。

なお、「福祉や介護の仕事についてどのように感じているか」と「将来、福祉や介護の仕事を希望している」との関係を見ると、「希望している」と回答した者では、「地域評価」と「職場の雰囲気」以外の項目において、肯定的な選択肢(例えば、やりがいがある、勤務条件がよいなど)を選択する傾向が有意に高くなっている。この点からも、福祉や介護の仕事に関する情報の提供や学びの機会の提供が重要になってくると考えられる。

Ⅶ 結語

福祉や介護の仕事に関心がある、将来の職業として希望していると回答した者は、福祉や介護の仕事について見たり体験したりしている経験を有している傾向があるということが明らかとなり、若い世代に、こうした体験などの機会を提供することは、今後の福祉・介護の人材確保において増々重要になってくると考えられる。祖父母との同居、家族内に要介護者がいるか、家族内に介護の仕事をしている人がいるかなどの属性との関係は認められなかった。

福祉や介護の仕事について、社会的な役割、必要性等を認めている者が多いが、一方で、勤務条件が必ずしもよくない、身体的・精神的負担度が高いなどの社会一般に流布しているイメージも認められる。また、福祉や介護の資格の周知度は必ずしも高いとは言えない状況にある。

回答傾向から、多くの者が、職業を通じて人間関係を深め、専門性を高め、感謝される存在でありたいと願っていると考えられる。福祉や介護の職場においては、若い世代に職業として選択され、専門性の高い職業人として働いてもらうために、人間らしい働き方ができる職場環境の形成にこれまで以上に努力する必要があると考えられる。

引用文献

- 1) 厚生労働省社会・援護局 福祉基盤課福祉人材確保対策室：「第8期介護保険事業計画に基づく介護職員の必要数について」(厚生労働省報道発表資料)、2021.7.9

- 2) 日本介護福祉士養成施設協会：「令和 4 年度介護福祉士養成施設の入学定員充足状況等に関する調査の結果について」、2022. 9. 20、<https://kaiyokyo.net/news/2022/000861/>
- 3) 藤沢緑子：「介護の仕事に対する高校生の意識」日本赤十字秋田短期大学紀要、17、2013. 3
- 4) 広島県社会福祉協議会：「福祉・介護の仕事に関する意識調査報告書」、2015. 10
- 5) 三重県福祉人材センター：福祉の仕事に関する意識調査報告書、2019. 1
- 6) 石川 久展, 大和 三重, 胡 宝奇：「高校生の福祉の仕事に対するイメージや就職意識の実態－兵庫県の高校生に対する実態調査の結果をもとに、「Human Welfare」、10－1、2018. 3
- 7) ILO 駐日事務所ホームページ：「ディーセント・ワーク」、<https://www.ilo.org/tokyo/about-ilo/decent-work/lang--ja/index.htm>

謝意

調査にご協力いただいた高等学校の生徒及び教員の皆様に心からの謝意を申し上げます。

執筆者紹介（所属）

岩舘亜紗美	八戸学院大学短期大学部介護福祉学科	講師
韓 志誠	八戸学院大学短期大学部介護福祉学科	2 年次学生
田嶋 美玖	八戸学院大学短期大学部介護福祉学科	2 年次学生
趙 彩云	八戸学院大学短期大学部介護福祉学科	2 年次学生
延足 愛莉	八戸学院大学短期大学部介護福祉学科	2 年次学生
宮崎 優香	八戸学院大学短期大学部介護福祉学科	2 年次学生
鳴海 孝彦	八戸学院大学短期大学部介護福祉学科	准教授
赤羽 卓朗	八戸学院大学短期大学部介護福祉学科	教授

この調査研究は、2022 年度八戸学院大学短期大学部介護福祉学科 2 年次科目における「研究演習Ⅱ・Ⅲ」（赤羽・鳴海・岩舘合同ゼミ）において担当教員の指導のもとに、学生が共同研究として実施したものである。文責は担当教員にある。